

「今度はアンタの番さ……運命なんざ、糞食らえ……だ」

——エレフ、ミーシャ……

吹きは、騒然とした群衆の中に消える。

傀儡と化した王は星女神の寵愛する勇者によつて星屑の矢に射られ、風神域の勇者は蠍の毒針によつて倒れ伏した。

「何故です……何故、兄上……っ！」

悲痛に滲んだ声は、厳かな室内に静かに反響した。

鎧ごと肉体を買いた槍から赤い血が滴り、持ち主の——レオンティウス腕を濡らす。教度小さく痙攣し、力を失くした体を支え……レオンティウスは最期まで問いかけた。

「何故、我らは……っ！」

「まだ……そんなことを言うか、愚弟よ……」

雷槍によつて討たれたことに何の感慨も見せず、スコルピオスはいつものように淡々と嘲りの言葉を口にする。

「だから……お前は甘いと言うのだ……反吐が出るような綺麗事ばかり……」

「奪い合い、憎み合い……こうして血を流すことに一体何の意味があるというのです……っ！」

「ふ……はは……意味はある。お前に鼻を引かれることにこそ、意味があるのだ……」

そして、野心に燃えた蠍は、獅子の雷槍によつて地に落ちた。

獅子レオンティウスの元に血濡れた玉座を残して——。

始まりは何処だったのだろうか、レオンティウスは考える。そもそもを振り返れば、弟妹の誕生かレオンティウス自身の誕生まで遡るのか。それとも、

この地上に争いばかり運ぶ人間が生まれた頃まで遡るのか。

少なくとも数か月前のあの一報は、レオンティウスの世界を揺るがすのに充分だった。

「星女神の巫女が……何だと!？」

「スコルピオス殿下が……水神の生贄に捧げたと」

レオンティウスは、それをトラキアの戦場で聞いた。報告してきたカストルの顔色も悪い。

「父上は、それをお許しになったというのか!」

「……はい。それどころか、自らお命じになったとか」

「馬鹿な」

思わず絶句してしまったのは、父と兄の蛮行について……そして、あの巫女の実験が永遠に失われてしまったことに対して。全くと言っていいほど現実味を帯びない報告に、レオンティウスはよろめきながら傍らの椅子に腰掛けた。

もう数年に渡って、父王が兄スコルピオスの傀儡であることには気付いていた。兄が玉座を望んでいることも知っていたから、それなりに気を付けてきたつもりだ。水面下で信頼できる者を使って暴挙を未然に防ぎ、隣国ラコニアでの動向を探る為に密偵も送り込んでいた。

にも関わらずこんなことが起こったのは、スコルピオスが性急に……殊更秘密裏に行動したとしか思えない。それが何の為かは分からないが、そのきっかけになったのは——

「ほう。……それは私も一度会ってみたいものだ」

(私のせいだ……)

レオンティウスは堪らず立ち上がった。

「殿下、どちらへ?」

「……数日で戻る。……レスボスへ」

幸い、トラキアから詩人の島まで近い。馬と船を飛ばせば然程時間を掛